

17世紀ネーデルラントの風俗画に描かれた老人たち

中村俊春

(美術史学会・京都大学文学研究科)

飲み屋で酩酊した男たちに、陽気に踊る農民たち、あるいは、居心地の良い室内で家事にいそしむ婦人や、着飾った男女の求愛の場面など、貧しい社会層から上流市民に至るまで、人々の日常の暮らしのさまざまな情景を描き出した風俗画は、17世紀のネーデルラント、とりわけオランダにおいて大きな人気を博した。かつて、これらの風俗画は、現実の世界をありのままに描き出したものと考えられていたが、オランダ美術に関しても盛んとなった図像学研究は、風俗画が決して純粹に写実主義的な絵画ではなく、そこには多くの場合、伝統的な宗教画や神話画と同様に、道德教訓や象徴的な意味が込められていることを明らかにした。また、種々の道德価値観を絵のメッセージとして伝達するために、風俗画の表現には、ある種のパターン化が見られることも確認された。本論で考察する老人たちを主題として描き出した風俗画でも、良き、好ましき老人と、悪しき、望ましくない老人という二つのタイプへの類型化が見て取れるのである。

16世紀の中頃にドイツとネーデルラントで成立し、その後、ヨーロッパ各国に広まった、誕生から死に至るまでの人生の諸段階を描き出した図像である「人生の階段」には、壮年期を頂点として、その後、加齢とともに衰えていく人の姿が描き出されているが、肉体の衰えが顕著となる老齢は、必ずしも、否定的にのみ捉えられていたわけではない。17世紀のオランダ社会で大きな影響力を有した道德詩人のヤーコプ・カッツは、老齢について、「確かに、老いたる日々は、我々を理性へともたらししてくれる。老齢は、我々の身体の節々に使いを送り、我々の腕、我々の胸、さらには我々の弱った足をノックして、我々に、間もなくこの世に別れを告げねばならないと教えてくれるのだ」と述べた。老齢は、あの世への旅立ちに備える貴重な期間であり、それゆえ、老人には正しく生きることが求められたが、長年の経験を通じて賢明となった老人には、若い頃には困難であったさまざまな欲望の抑制も比較的容易であり、節制、謙虚など、神の意に適ったさまざまな徳を備えた人間として生きることができると考えられたのである。そして、オランダの風俗画では、老人の日常の暮らしぶりを通じて、たとえば、聖書を読んだり、食前の祈りを捧げたりする老人の姿によって、こうした美德が表現された。また、しばしば、仕事に励む老人が描かれたが、これは、救済者の待つ天国での生を祈念しつつ、身体の状態が許す限りは勤勉に働き続けるべきであるとする、労働に関する当時の道德観を反映した表現であると考えられる。

老人は、来世を強く意識するようになるために、総じて、敬虔で高潔な存在になると考えられていたが、その一方で、残り少ない現世の生への固執は、さまざまな悪徳、

中でも特に、好色、過剰な吝嗇、および怠惰に陥ってしまう危険性もあるとされた。これらの悪徳は、不釣り合いなカップル、貨幣を計る老人、あるいは居眠りする老人などによって表されたのである。

もともと、風俗画は道德教訓の単なる図示なのではない。そして、それが表すものは、容易には言葉によって汲み尽くしえないように思われる。たとえば、子供の髪の新シラミを取る老女を描き出した作品は、祖母による孫の世話という家庭における老女の役割を示唆する道德的主題と考えられるが、世話する者と世話される者を逆転させて、眠り込んだ老人の新シラミを取る少女を描いた作品からは、とうてい教訓的なメッセージには還元しえないような親密感溢れる独特の詩情が漂ってくるのではないだろうか。